



■親になるということ—子育ては“自分育て”—

こども家庭庁が「親子のための相談 LINE」を開設しています。これは、子育てや親子関係について悩んだときに、こども（18歳未満）とその保護者の方などが相談できる窓口です。

自分が子どもの時には、親は「何でも知っている」「全て正しい」という感じでした。子どもにとって親は絶対的な存在であったように思います。当たり前のことですが、誰も最初から親なわけではありません。子どもを授かって初めて“親”となるのです。親は親なりに、初めての子育てにとまどいながらも、子どもを正しい方向に導こうとして試行錯誤を繰り返しながら奮闘しているのだと思います。子どもの前では、ある種親としての威厳を保ちながらも内面では悩み、迷うこともあったでしょう。親となった

時、初めてその苦悩が実感できました。私自身、子育てがほぼ終わった歳になり、当時を振り返ってみると「あの時こうしてあげればよかった」「かわいそうなことをしたなあ」「こうしていたら違う結果になったかも？」など後悔の念に似た感情が湧いてきます。祖父母が孫をかわいがる傾向にあるのは、これまでの経験値に加え、子育て当時の後悔や反省の念を交えながら「今ならこんな風に接することができるのに」という思いに駆られるのだとも思います。ただ多くの親は、親になって間もない頃の慣れない子育てに対して、わからないことが多くありながらも懸命に向き合う努力をしてきたと思います。幾多の反省はしながらも、その事実については肯定的に受け止めてよいのではないのでしょうか。

子どもは一人一人異なった性格をもっています。兄弟姉妹であっても、まったく同じ性格というわけではありません。ただ、子どもは親の遺伝子を受け継いでいますから、自分の子ども一人一人が見せる性格や行動は、親自身がその要素を内包しているといえます。子育てを通して子どもの言動に接することで「親である自分にはこんな一面もあるんだ」と、これまで自分では意識していなかった部分を顕在化させてくれることもあります。子育ては、親である自分自身が持っている様々な可能性を確認しながら、より高みを目指していく“自分育て”でもあると思います。

子どもは、家族にとって、学校にとって、地域にとって宝物であるはずですが、迷いながら、悩みながらも互いに協働・連携しながら子育てに向き合っていければいいと思っています。



そして、子育てを“自分育て”にとらえるならば、子どもであっても大人であっても、互いに一人一人の前向きな姿勢をリスペクトする気持ちを持ち続けていきたいと思えます。

追伸

私事ですが、3月末をもって役職定年となり三高を去ることとなりました。校長発『本流』もこれが最終号となります。令和5年4月3日に発刊（校長発『本流』4月号）して以来2年間で通算49号発刊することができました。『本流』という名称には「枝葉末節にとらわれず物事の大局をとらえ正々堂々と意見の言える、また流量豊富な大河のように、器の大きさ・懐の大きさをあわせ持つ人であってほしい」という願いを込めています（「本間流」というニュアンスも加味しています）。毎号、皆さんにお伝えしたいことをテーマにして発刊してきました。ご高覧いただけたならば幸甚です。

「われらの三高 ここにありと ひとしくともに 誇るべし」

今後の三高の益々の発展を祈念しています。

これまでありがとうございました。

